

医療処置時における小児患者の心理的準備  
—混合病棟に勤務する看護師のプレパレーションの認識と実施状況—

Psychological preparation for child health nursing among nurses  
on mixed child and adult hospital wards

宮内 環\* 寺井 孝弘\*\*  
Tamaki MIYAUCHI Takahiro TERAI

**Abstract**

**Purpose:** Japan is facing a severely decreasing birthrate. As a result, many pediatric wards are closing or have reduced capacity; therefore, the number of mixed wards hospitalizing both adults and children is increasing. This study aims to clarify current issues regarding the psychological preparation for child health nursing among nurses on child and adult hospital wards in Japan.

**Methods:** A total of 500 nursing staff members from general hospitals in the Kinki and Hokuriku regions with pediatric departments and  $\geq 500$  beds were sent a self-report questionnaire. The questionnaire identified factors contributing to nurses' recognition and methods of preparation for pediatric patients according to their personal attributes and child health nursing experience. The study was conducted from January to March 2012, and responses were received from 233 nurses (164 from pediatric wards and 69 from mixed child and adult wards). Only the responses of the 69 nurses from mixed wards were included in the final analysis.

**Results:** The nurses' mean age was  $33.29 \pm 9.25$  years and their mean number of years of child health nursing experience was  $4.54 \pm 4.76$  years. About 60 percent of the nurses recognized "lumbar puncture/bone marrow aspiration" and "kidney biopsy/intracardiac catheterization" to be "difficult procedures for practice psychological preparation". It is because these require the special practice about "child health nursing" as this reason.

**Conclusions:** These findings indicate the need to consider methods that allow nurses who work in mixed wards to practice psychological preparation.

**キーワード:** 小児患者, プレパレーション, 医療処置, 看護師, 混合病棟

---

\* 関西国際大学保健医療学部      \*\* 金沢医科大学看護学部

## I. はじめに

小児は、特に痛みを伴わない医療処置であっても、見慣れない器具を目にすると、何をされるかわからない恐怖から泣き出し、抵抗することがある。そのため処置前には、その子の認知能力に応じた説明を行い、実施中には遊びを取り入れ、気を紛らわすなどの援助を行う必要がある。しかし小児患者は成人患者よりも、採血やレントゲン・画像検査への対応、術前処置、清潔ケアなど、あらゆる場面において多くの時間や労力を要し、援助に際して成人とは異なる子ども特有のアプローチや知識が不可欠である。

わが国では1999年に、日本看護協会が「小児看護領域の看護業務基準」を作成し、子どもの権利を尊重した看護の提供を提唱後、徐々にプレパレーションが実施されるようになった<sup>1)</sup>。プレパレーションとは、認知発達に応じた方法で病気、手術、検査、その他の処置について説明を行うことであり、治療や検査を受ける子どもの心理的な準備を促して対処能力を引き出すような環境および機会を与えることである。以前は処置前の準備的な説明のみを意味したが、現在は“病院に来る前（第一段階）”“発達心理的身体的アセスメント（第二段階）”“医療行為などの説明（第三段階）”“処置中のディストラクション（第四段階）”“検査や治療終了後の post procedure play（第五段階）”の5段階があると言われている<sup>2)</sup>。その有効性は、子どもの痛みや心理的混乱を軽減し、治療へのコーピングが高まると報告され<sup>3-7)</sup>、実施頻度をさらに高めていく必要がある。

一方、わが国では、少子化によって小児の入院数が減少していることと<sup>8)</sup>、成人患者と比べて人手を要する割に採算面では報われない小児医療の現状から<sup>9)</sup>、成人患者と小児患者が入院する混合病棟が増え続けている。そして、小児患者が入院していても、看護師の人員配置が成人患者と同じ単位で捉えられる混合病棟では<sup>10)</sup>、小児だけが入院する病棟に比べ、看護師のマンパワー不足が生じやすく、プレパレーションを実践する際の課題は多い。

そこで、今後も増え続ける混合病棟に勤務する看護師のプレパレーションの認識と実施状況を調査したいと考え、今回は、プレパレーションの実施が困難と認識する医療処置と、プレパレーションの段階別実施状況を検討することにした。

## II. 研究目的

小児が経験する医療処置に関して、混合病棟に勤務する看護師のプレパレーションの認識と実施状況を調査することである。

## III. 用語の定義

プレパレーション：治療や検査を受ける子どもに対し、認知発達に応じた方法で病気、手術、検査、その他の処置について説明を行い、子どもや親の対処能力を引き出すような環境および機会を与えることである。本研究ではプレパレーションのプロセスを、先行研究<sup>2)</sup>を参考に、“第一段階：受診前あるいは入院前の情報収集・アセスメント”“第二段階：医療行為などの説明”“第三段階：処置中のディストラクション”“第四段階：検査や治療終了後の post procedure play”の4つとした。

子ども：3歳から11歳までの子どもとし、ピアジェの認知発達理論で述べると前操作期から具体的操作期とした<sup>11)</sup>。

## IV. 研究方法

### 1. 調査対象

小児科を標榜する500床以上の総合病院とし、人口約100万～250万人の県内19施設と約500万～800万人の県内11施設に勤務する看護師500名のうち、混合病棟に勤務する看護師69名である。

### 2. 調査方法

各施設の看護部長に依頼文にて研究を依頼し、対象となる看護師へ依頼文、自記式質問紙、返信用封筒を配布してもらい、記入後、看護師個人で研究者へ返送してもらった。調査期間は平成25年1月から3月である。

### 3. 調査内容

質問紙の構成は先行研究<sup>12-13)</sup>を参考として以下とした。

- 3.1. 看護師の属性：所属病院の設置主体と最終学歴を選択式で、小児看護経験年数を実数での回答とした。
- 3.2. プレパレーションの認識：プレパレーションを行うのが困難と思う医療行為について、「内服・点眼」「吸入」「腰椎穿刺・骨髄穿刺」「採血」「点滴・注射」「手術」「CT・MRI・X-P検査」「腎生検・心臓カテーテル検査」「入院時オリエンテーション」のうち3つを選択するよ

表1. プレパレーション4段階別実施内容

第一段階 アセスメント	子どもの状況をアセスメントし、どのような言葉で説明するかを考える これから経験する処置・検査・手術に対する子どもの気持ちを聴いている 子どもの発達段階をもとにツールの選択をしている 子どもが今から処置・検査・手術を受ける気持ちになっているかを確認している 保護者が同席するか否かについて、子どもに希望を確認している
第二段階 説明	具体的にわかりやすい言葉で説明している 子どもと目の高さを合わせて説明している 子どもが質問した場合には具体的にわかりやすく答えている 子どもに進行状況を説明している 処置・検査・手術の前に説明をしている 対処法（例：痛みを感じた時に手を上げるなどサインを決める）について説明している
第三段階 ディストラクション （処置中の気晴らし）	常に声をかけ、励ますようにしている 処置室をキャラクターで飾り付けるなど工夫している 愛着のあるおもちゃやタオルを持ってもらう 看護師自身の持ち物や衣服をキャラクターで飾り付けるなど工夫している 好きな音楽を聴いてもらう 医療器具や椅子をキャラクターで飾り付けるなど工夫している
第四段階 『検査・処置・手術 後のケア』の実践	子どもの頑張りを褒めるようにしている 終わったことを言葉で子どもに伝えるようにしている 気持ちの表出を促すような声かけをしている 一緒に遊ぶことで気持ちの表出を促すようにしている

うに設問した。

- 3.3. 看護師のプレパレーションの実施状況：4件法で回答を求めた。プレパレーションのプロセスごとの実施状況は、研究者らが作成した各段階の具体的な内容を紙面上に示し（表1）、2件法で回答を求めた。

なお、本研究の子どもの定義については文章で質問紙に明示した。

#### 4. 分析方法

対象者の属性と、プレパレーションの認識・実施状況の基本統計量を算出した。属性のうち年齢は平均値と標準偏差で3群とし、小児看護経験年数は中央値で2群に、4件法で回答を得たプレパレーションの認識・実施状況は2群にグループ化した。対象者の属性とプレパレーションの認識・実践状況との関係は、 $\chi^2$ 検定、Fisherの直接法を行って検討し、有意水準は5%とした。

#### 5. 倫理的配慮

金沢医科大学の研究倫理審査委員会で承認を得た（平成24年12月17日：番号152）。研究参加の意志は質問紙の返信によるとし、文書で「参加の任意性の強調」「無記名個別回収」「データの匿名性の保証」「データ管理の安全性の保証」「データは研究目的以外では使用しない」「公表予定」について説明した。また、配布に際しては強制力がかからないように配慮をお願いした。

### V. 結果

#### 1. 対象者の背景 (n=69)

所属病院の設置主体は医療法人が40.6%，独立行政法人国立病院機構および公立病院が33.3%，大学病院が26.1%であった。小児看護経験年数は平均4.54年（SD4.76）で1.0～26.0年，年齢は33.29歳（SD9.25）で21～55歳であった。最終学歴は看護専門学校が最も多く69.6%，次いで看護系大学（4年生制・短期大学）が27.5%，大学院が2.8%であった。

#### 2. プレパレーションの認識状況（図1）

“プレパレーションを行うのが困難と思う医療行為”（n=67：3つ選択）は、図1の通りであ

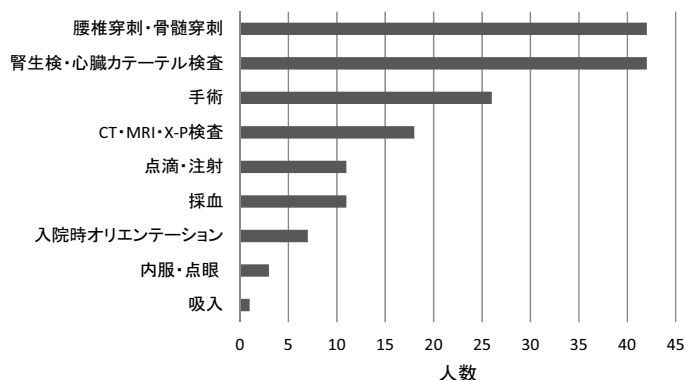


図1 プレパレーションを行うのが困難と認識する医療行為（n=67：3つを選択）

り、「腰椎穿刺・骨髄穿刺」「腎生検・心臓カテーテル検査」がそれぞれ約6割で最も多く、「入院時オリエンテーション」が約1割、「内服・点眼」「吸入」が1割以下と最も少なかった。

3. 段階別実施状況と“プレパレーションを行うのが困難と思う医療行為”との関連(図2・3・4)

プレパレーションの段階別実施について、「実施している～ときどきしている」群と「あまりし

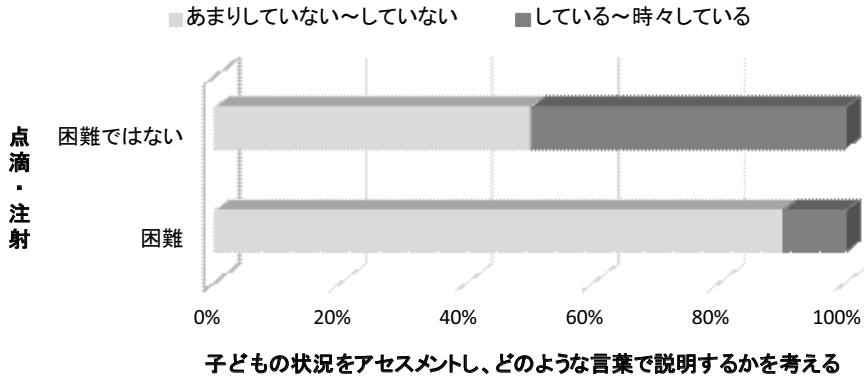


図2 段階別実施状況と「点滴・注射」の関連 (n=36 p < .05) Fisherの直接法

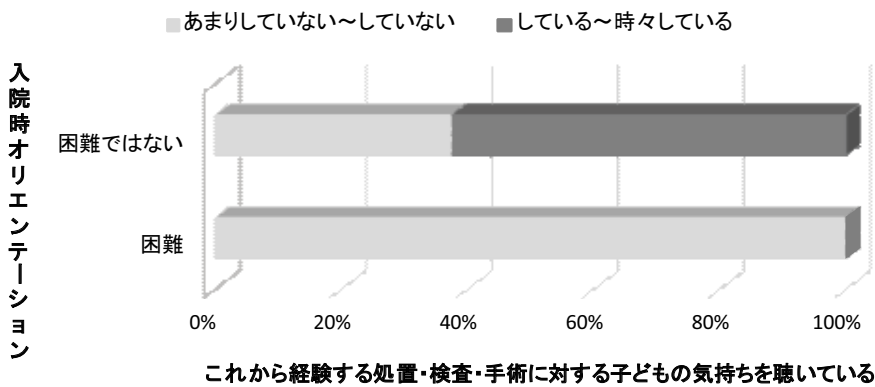


図3 段階別実施状況と「入院時オリエンテーション」の関連① (n=36 p < .05) Fisherの直接法

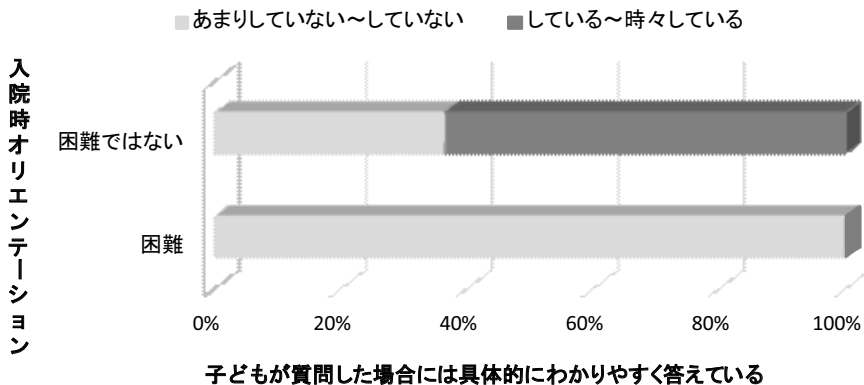


図4 段階別実施状況と「入院時オリエンテーション」の関連② (n=37 p < .05) Fisherの直接法

ていない～していない」群を，“プレパレーションを行うのが困難と思う医療行為”で比較すると、第一段階の『子どもの状況をアセスメントし、どのような言葉で説明するかを考える』は、「点滴・注射」が困難と回答した群において実施割合が低かった ( $p=.045$ )。そして『これから経験する処置・検査・手術に対する子どもの気持ちを聴いている』は、「入院時オリエンテーション」が困難と回答した群において実施割合が低かった ( $p=.031$ )。

また、第二段階の『子どもが質問した場合には具体的にわかりやすく答えている』は、「入院時オリエンテーション」が困難と回答した群において実施割合が低かった ( $p=.028$ )。

## VI. 考察

プレパレーション実施が困難と思う医療行為のうち最も多かったのは「腰椎穿刺・骨髄穿刺」「腎生検・心臓カテーテル検査」であった。これらの検査は、成人患者とは異なるアプローチが不可欠であり、特に子どもの発達を踏まえた知識や技術が必要だからである。

そして、プレパレーション実施が困難と思う医療行為と段階別実施状況との関連では、「点滴・注射」が困難と回答した群で、第一段階の『子どもの状況をアセスメントし、どのような言葉で説明するかを考える』の実施割合が低かった。これは点滴や注射の際に、その必要性や方法、痛みの程度や見通しに関する説明を、適切な言葉で子どもに行う援助を実践するのが難しいことを示し、時間やマンパワーが不足する混合病棟の特徴が影響している。

また、「入院時オリエンテーション」が困難と回答した群では、第一段階の『これから経験する処置・検査・手術に対する子どもの気持ちを聴いている』と第二段階の『子どもが質問した場合には具体的にわかりやすく答えている』の実施割合が低かった。これは、事前に子どもの気持ちを予測し、子ども自身が気持ちを表出できるように関わることや、尋ねられたことに対して、子どもが理解できるように説明する難しさを示している。この援助には、子どもの認知発達に関する知識とコミュニケーション技術が必要であるため、成人患者と小児患者の各々への専門性が求められる混合病棟では、難しい実践だからである。

今回明らかになった課題を踏まえ、今後増え続ける混合病棟で、小児患者に対するプレパレーションの実施頻度が増えるように取り組んでいかなければならない。

## VII. 結論

混合病棟に勤務する看護師の、小児に対するプレパレーションの認識と段階別実施状況について以下が明らかとなった。

1. プレパレーションの実施が最も困難な医療行為は、「腰椎穿刺・骨髄穿刺」「腎生検・心臓カテーテル検査」であり、それぞれ約6割であった。
2. 第一段階の『子どもの状況をアセスメントし、どのような言葉で説明するかを考える』は「点滴・注射」が困難と回答した群で実施割合が低かった。
3. 第一段階の『これから経験する処置・検査・手術に対する子どもの気持ちを聴いている』は「入院時オリエンテーション」が困難と回答した群で実施割合が低かった。
4. 第二段階の『子どもが質問した場合には具体的にわかりやすく答えている』は「入院時オ

リエントリー」が困難と回答した群で実施割合が低かった。

#### 【謝辞】

本研究にご協力下さいました対象者の皆様に深く感謝いたします。

本研究の一部は9th International Nursing Conference 2013 & 3rd Academy of Nursing Science (Seoul, Korea)にて発表した。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 松森直美, 蝦名美智子, 今野美紀, 他「手術を受けた子どもへのプレパレーションに関する親の意識」『日本小児看護学会誌』20巻2号, 1-9頁, 2011
- 2) 田中恭子「プレパレーションの5段階について」『小児看護』31巻5号, 542-547頁, 2008
- 3) 佐藤志保, 塩飽仁「外来で採血を受ける子どもに行うプリパレーションの有効性の検証」『北日本看護学会誌』10巻1号, 1-12頁, 2007
- 4) 下山美樹, 畔崎麻貴子, 馬場絹美, 他「幼児に対するプレパレーションを試みて一採血の説明に紙芝居を取り入れての効果」『長崎県看護学会誌』6巻1号, 19-24頁, 2010
- 5) 平直美, 中根由紀子「幼児後期の子どもへの内服指導の効果—内服指導のプレパレーションを試みて」『日本看護学会論文集(小児看護)』38巻, 340-342頁, 2008
- 6) 薦田彩会, 松森直美「子どもに対する血圧測定の前パレーションの効果に関する検討」『日本小児看護学会誌』20巻1号, 120-126頁, 2011
- 7) 半田浩美, 二宮啓子, 西平倫子, 他「心臓カテーテル検査を受ける幼児後期の子どもへの模型と人形を用いた効果的なプレパレーション」『日本小児看護学会誌』17巻1号, 23-30頁, 2008
- 8) 厚生労働省(平成23年度受療率:人口10万対), 入院-外来・性・年齢別 第2-63表, 検索日2014年8月1日, [http://www.mhlw.go.jp/toukei/youran/indexyk\\_2\\_2.html](http://www.mhlw.go.jp/toukei/youran/indexyk_2_2.html)
- 9) 松平隆光「小児医療の“採算性”」『患者のための医療』1巻3号, 516-519頁, 2002
- 10) 石浦光世, 町田和嘉子, 坂本美和「混合病棟のなかでの看護倫理」『小児看護』35巻8号, 986-993頁, 2012
- 11) Butterworth G, Harris M. 1994/村井潤一訳『発達心理学の基本を学ぶか』ミネルヴァ書房, 1997
- 12) 齋藤美紀子, 高梨一彦, 小倉能理子, 他「プレパレーションに対する看護者の認識とその実施状況」『弘前学院大学看護紀要』, 5巻, 47-56頁, 2010
- 13) 北野景子, 内海みよ子, 和田聖子, 他「プレパレーションの5段階における看護師の認識と実践の現状」『日本小児看護学会誌』21巻3号, 44-51頁, 2012

